ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレールの 1474 年ディジョン入市式について

河原　温

はじめに

1474 年 1 月 23 日に、第 4 代ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレール(突進公)は、ブルゴーニュ公位を正式に得るとともに、父親である先代のブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボン(善良公)の遺体を公家の菩提寺であるシャンモールのシャルトルーズ修道院に最終的に葬るため、彼の生地ディジョンを訪れ，都市への儀礼的入城（*joyeuse entrée*）を果たした。シャルルのディジョンへの入市儀礼は、彼のブルゴーニュ公領統治においていかなる意味をもつものであったのか。本稿では、ブルゴーニュ公としてシャルルが行った 20 回以上にわたる公領のさまざまな都市への入市式の歴史的文脈の中に当該入市式を位置づけ、シャルルによる 1474 年のディジョン入市式の歴史的意義について若干の考察を試みたいと思う。

13 世紀以来、フランス王をはじめとして各地の王侯により行われた（都市）入市式は、新たに即位した君主が彼の支配領域（都市）に入城し、一定の名誉と特権を付与する代わりに臣下（都市）から贈り物を含む歓迎祝典を受ける儀礼であった。当初、入市式は、つつましい式典であったが、14 世紀後半以降になると、長い時間と複雑なプロセスをもつスペクタクルへと変化していった。都市役職者、教会人、法律家など都市のエリート層による君主の出迎えの演出が活人画や神秘劇、プロセッションなどより大仕掛けの装置を通じてなされたのである。中世後期の王侯特にフランス王による入市式については長い研究史があるが[1]、フランス王家に属しながら、王の称号を持つには

[1] 特にフランス王権によるパリ入市式がそのモデルと言ってよい。B.Gunée ＆F.Lehoux, *Les Entrées royales françaises de 1328 à 1515, Sources d'Histoire Médiévale*, Paris, 1968; L.Bryant, *The King and the City in the Parisian Royal*

至らなかった歴代ブルゴーニュ公による都市入市式についても、近年研究が進展している。とりわけフランドル、ブラバントをはじめとするネーデルラント諸都市を支配下においたフィリップ・ル・ボンと息子のシャルル・ル・テメレールの入市式については、近年 J.D.ヒュルバット、E.ルクープル・デ・ジャルダン、E.A.タブリ、M.ボーネらによって彼らの統治政策や宮廷儀礼の文脈において議論されてきた[2]。

以下では、シャルルのディジョンへの入市式に関わる記述史料を編纂した H.Chabeuf の先駆的論稿と、彼の仕事を他の史料によって補正した P.Qurré の論稿に基づきながら、その意義について考えてみたい[3]。

1　1474 年 1 月のディジョン入市式の過程

シャルル・ル・テメレールは、1467 年に父親のフィリップ・ル・ボンの死去により、第４代のブルゴーニュ公となった。彼は、以後ヘントをはじめとする強力なフランドル諸都市をブルゴーニュ公権の支配下におくべく、優勢な軍事力と宮廷の官房長ギョーム・ユゴネが担った外交交渉によりネーデル

Entry Ceremony: Politics, Ritual and Art in the Renaissance, Genève, 1986; G.Kipling, *Enter the King.Theatre, Liturgy and Ritual in the Medieval Civic Triumph,* Oxford, 1999 などがその代表的研究である。その他の諸侯や司教の入市式については、D.Rivaud, *Entrées épiscopales, royales et princières dans les villes du Centre-Ouest de la France XIVe-XVIe siècles*, Genève, 2013 を参照。

[2] 特に本稿に関連するシャルル・ル・テメレールの入市式についての主要な研究として、以下の文献を参照。J.D. Hurlbut, *Ceremonial Entries in Burgundy: Philip the Good and Charles the Bold(1419-1477)*, Doctoral Dissertation, Indiana University, UMI,1990; Id., Symbols of Authority: Inaugural Ceremonies for Charles the Bold, in: *Staging the Court of Burgundy,* Turnhout, 2013, pp.105-112; E.Lecuppre-Desjardin, *Ceremonies des villes. Essays sur la communication politique dans les anciens Pays-Bas bourguignons, Turnhout,* 2004, pp.136-158; E.A.Tabri, *Politiical Culture in the Early Northern Renaissance. The Court of Charles the Bold, Duke of Burgundy(1467-1477)*,Lewiston, 2004; M.Boone, Charles le Téméraire face au monde urbain: ennemis jurés et fatals? , in: *Karl der Kühne von Burgundy. Fürst zwischen europäischem Adel und der Eidgenossenschaft*, Zürich, 2010, pp.185-201; W.Blockmans et al. (eds.), Staging the Court of Burgundy, Turnhout, 2013.

[3] P.Qurré, La <joyeuse entrée> de Charles le Téméraire à Dijon en 1474, *Bulletin de la Classe des Beux-Arts*, t.51, 1969, pp.326-345.

ラントの政治的統合と集権化を試みた[4]。1467 年から 1468 年にかけては、ヘントやリエージュを武力行使と儀礼的処罰を通じて抑止しながら、ブルゴーニュ公権のうちにネーデルラント諸都市を統合していったのである[5]。これに対し、南部ブルゴーニュ公領の都市ディジョンは、シャルルの生地でもあり、1461 年にまだシャロレ伯であったシャルルが最初の入市式を行った都市でもあった[6]。シャルルは、ブルゴーニュ公に即位して以降、順次行っていた公領の主要な都市への入市式の一環として、ディジョンへの入城も 1469 年には計画していたが、北部ネーデルラントの統合や神聖ローマとの対外関係におわれ、この時期には実現しなかったのである[7]。

シャルルは、1473 年 9 月から 11 月にかけて、トリアーにおいて神聖ローマ皇帝フリードリヒ 3 世と会談を行った[8]。彼はその際、フリードリヒから「ローマ王」(roi des Romains) の称号を得ることと、彼の娘のマリーとフリードリヒの息子のマクシミリアンとの結婚を実現しようとしたが、いずれも果たせないまま会談を終えることになった。11 月 25 日にシャルルはトリアーを去って、官房長（chancelier）ギョーム・ユゴネをはじめとする彼の宮廷の廷臣たちと共に南へと向かい、12 月初めにティオンヴィルに到着した。そこ

---

[4] M.Boone, op.cit., pp.190-193.

[5] この時期のシャルルの統合政策については以下の文献を参照、河原温「15 世紀ブルゴーニュ公国における地域統合とフランドル都市―ブルゴーニュ公とブルッヘの儀礼的関係を中心に―」渡辺節夫編『ヨーロッパ中世社会における統合と調整』創文社、2011 年、244－246 頁；L.Smagghe, *Les Émotions du prince. Émotion et discours politique dans l'espace bourguignon*, Paris, 2012, pp.195-204；E.Lecuppre-Desjardin, The Distorted Messages of Peace Controlled and Uncontrolled Reactions to Propaganda in the Burgundian Low Countries during the Fifteenth Century, in : *Power and the City in the Netherlandic World*, Leiden, 2006, pp. 45-57.

[6] 15 世紀のディジョンとブルゴーニュ公家の関係については、中堀博司「ブルゴーニュ宮廷の故郷ディジョン」『ブルゴーニュ公国の宮廷と都市―中・近世ヨーロッパの十字路』（東北学院大学オープン・リサーチセンター）、2011 年、370－385 頁を参照。

[7] E.A.Tabri, op.cit., p.121.

[8] R.Vaughn、*Chalrles the Bold. The Last Duke of Burgundy*, London, 1973/2002, pp.123-155.

で彼の有名な勅令（Ordonnances de Thionville）が発せられたのである[9]。その後 12 月 16 日に彼はロレーヌ公領のナンシーに移動し、そこでロレーヌ公ルネ 2 世と親交を深めた。その後、12 月後半から 1 月上旬までシャルルは、アルザス地方に滞在し、ブザンソンを経てブルゴーニュ公領に入ったのは、1474 年 1 月 18 日であった。彼は、Auxonne にあった自身の城（chateau de Rouvres）に 2 日間留まった後、1 月 21 日には彼の廷臣の一人ギョーム・ロラン Guillaume Rolin の城（Perrigny）に滞在した。翌日の降雨のため当初予定されていた日程を 1 日延期して、シャルルは、1 月 23 日の日曜日に正式にディジョンへと入城した[10]。

彼のディジョンへの入市プロセスについては、E.シャブッフにより編纂された無名の記述史料（*L'advis pour l'entrée de Monseigneur et priuse de possession pour son duchié et des personnaiges et moralitéz joués à la joyeuse venue du Monseigneur le duc Charles en sa ville de Dijon*）が最も詳細な記録である[11]。このテクストによると、シャルルのディジョン入市は、以下のようなプロセスをとった[12]。

(1)　**市門の外への到着**　1474 年 1 月 23 日に、シャルルと彼の取り巻きは、Perrigny の近くで彼の一行を迎えたディジョンの市長 Jacques Bonne、エシュヴァンと上層市民（les echevins et bourgeois d'icelle ville）、およびボーヌ、シャロン、オータンなどブルゴーニュ公領の諸都市の代表たちにより挨拶を受けた。彼らを代表して市長代理のエティエンヌ・ベルビシィ（Étienne Berbisey）が、シャルルに最上の歓迎の意を示すとともに、ディジョンのサン・ベニーニュ教会において、先代のブルゴーニュ公と同様にシャルルが「都市ディジョンの諸特権、自由、そしてフランシーズ」< privileges, libertéz et franchises de lad.

---

[9] メヘレン高等法院設立に関する条項（1－8 条）を含むこの勅令については、Jan Van Rompaey, *De Groote Raad van de hertogen van Boergondië en het parlement van Mechelen*, Brussels, 1973 を参照。

[10] Vaughn, *Charles the Bold*, p.276 ; P. Quarré, La <joyuese entrée> de Charles le Téméraire à Dijon en 1474, p.331.

[11] この史料の写本については、Quarré、ibid, pp.331－332.

[12] E.Chabeuf, Chalres le Témélaire à Dijon en Janvier 1474, *Mémoires de la société bourguignonne de geographie et d'histoire*, t.18, 1902, pp.257-291; Quarré, op. cit.,pp.331-333; 338-339.

ville de Dijon> を確認することを懇願した[13]。シャルルはそれに同意を与え、騎乗した騎士たちを同伴してディジョンへと向かった。一行の先頭には、オータン司教ジャン・ロラン Jean Rolin が騎乗してシャルルと共に進んだ。これに対し、式服をまとったシャロン司教、シトー会修道院長たち、そしてサン・ベニーニュ教会の聖職者たちやその他のディジョンのすべての聖職者、学校教師たちがディジョンの市門の外までシャルルを出迎えた。

(2) **聖ヨハネ通り**　続いて、シャルルの一行は、Osche 門からディジョンの市内へと入城し、聖ヨハネ通りに面した市長の邸宅前へ進んで、そこで短い儀式が行われた。シャルルは騎乗のままその儀式に参加した。シャルルは、ルビーと真珠のついた豪華なマントを着用していた。市長、エシュヴァン、そして何人かのブルゴーニュ貴族たち、およびシャロン・シュル・ソーヌ司教たちの前でシャルルは、都市ディジョンの特権と自由(フランシーズ)を確認した。

(3)　サン・ベニーニュ教会　シャルルの一行は、その後、騎乗のままサン・ベニーニュ（Saint Bénigne）教会へと進んだ。行列の先頭は、枢機卿のジャン・ロラン(オータン司教)および近隣のシトー会修道院長たちであった。サン・ベニーニュ教会へ到着すると、シャルルは、馬からおり、教会へと入った。シャルルは、サン・ベニーニュ教会の聖職者たちにより主祭壇へと導かれた。そこで、シャルルは、サン・ベニーニュの聖遺物箱の前で祈るためにひざまずいた。続いて、シトー会修道院長が「この地のすべての諸身分のために」短く挨拶を行った。この挨拶にシャルルの廷臣ギョーム・ユゴネが応答した。サン・ベニーニュ修道院長ユード四世（EudesIV）が短い祝福の祈りをささげ、シャルルと彼の祖先の君主（歴代のブルゴーニュ公）たちを称えてサン・ベニーニュ教会への彼らの奉仕に感謝したのち、シャルルが主祭壇の前に進み出ると、彼の右手に（ブルゴーニュ）公領の所有の印として指輪をはめた[14]。シャルルは、公領の領有を宣言するとともに、ディジョンの市

---

[13] Chabeuf, ibid., pp.278-279.

[14] このルビーのついた指輪は、フィリップ・ル・アルディが公領の所有の印として、後代のブルゴーニュ公に与えるために 1397 年に購入してサン・ベニーニュ教会にもたらしたものとされる。Qurré, op.cit.,p336.

長、エシュヴァンらに対して「ディジョンの特権と自由」（lesdiz previleges, franchises et libertéz de ladicte ville de Dijon）を以前のブルゴーニュ公たちがなしてきたのと同じやり方で維持し、守り、遵守することを誓約した。また歴代ブルゴーニュ公と同様に、サン・ベニーニュ教会（の礼拝堂）の諸特権と自由を確認した。[15]これに対して、参列していたディジョンの市長、エシュヴァンらは、「彼(シャルル)の真の、忠実な臣下」< ses vrais et loyaux sujets> となり、彼に服従することを誓約したのである。

シャルルは、その後、慣習に従って参事会の礼拝堂（chapelle collégiale）へ入り、先代のブルゴーニュ公の時代に与えられ、確認されてきた自由と諸権利を参事会員や助祭たちが保持することを約した。このようにして入市の儀礼を終えたシャルルは、公の邸宅へと入った[16]。

(4)　活人画の舞台

さて、この入市式の進行に伴って、市門から公の邸宅までのルートにおいて、一連のマイム劇（活人画）の舞台が設営された[17]。この活人画の舞台は、旧約聖書からとられた 7 つの場面から構成されていた。シャルルとその一行は、この舞台を見ながら公の邸宅へと向かったのである。

①　シャルルが入城した Ouche 門の市壁に設置された舞台。それぞれ巻物をもった二人の預言者が立ち、一方の巻紙には「主は汝の入城と退場を見守る」<dominus custodita introitum tuum et exitum tuum>とあった。

②　続いて同じく市壁のそばの橋のたもとで一人の預言者が立っている舞台。彼の持つ巻紙には「破壊の中で門を入れ」<Introite portas ejus in exustatione>とあった。

③　聖ヨハネ通りに、より広い舞台が設定され、紫のマントをまとったイエスが中央におり、その両側に天使が立っていた。イエスの周りには三身分を表す者たちが立っており、第一身分（祈る者）を代表する人物（l'un des

---

[15] Chabeauf, Charles le Téméraire à Dijon, p.288.
[16] Quarré, op.cit., p.338.
[17] Chabeauf, op.cit., pp.259-266 ; Quarré, op.cit., pp.333-338.君主の入市式における活人画（タブロー・ヴィヴァン）の役割については、京谷啓徳「タブロー・ヴィヴァン考：君主の入式式におけるその使用をめぐって」『西洋美術研究』15、2009 年、169－185 頁を参照。

personnagiges desd. Trois éstas represantant l'église）が手に「主の名においてやってくる祝福」<Benedictus qui venit in nomine Domini>と記された巻物をもって立ち、第二身分（貴族）を表す人物が巻紙「地上のすべての種族がソロモン（王）の所業を見ることを欲している」<Omnes gentes terrarium desidderabant videre faciem Salomonis>をもち、さらに第三身分（働く者）を表す人物が同じく巻紙「見よ、全ての種族によって望まれた者がやってくる」<Ecce venit desideratus cunctis gentibus>をもって立っていた。

④　同じく聖ヨハネ通りにおいて、一人の天使を伴ったギデオンが金羊毛騎士団の紋章を付けた貴族戦士として立つ舞台。彼が手に持つ巻紙には、「人々の主は、汝と共に強くあれ」<Dominus tecum virorum fortissimo> と記されていた。彼と共に、金羊毛騎士団の旗をもった数名の騎士（plusieurs hommes d'armes）がいた。他方に紋章を付けたサラセン人の戦士と数人の騎士と喇叭手が立っていた。

⑤　同じく聖ヨハネ通りの前の舞台。ブルゴーニュ公の紋章を付けた布で覆われた大きな獅子とその右側に、預言者エレミアが「（ユダに）主からの賜物であるこの聖なる剣を取り、それで敵を倒せ」< Accipe sanctum gladium munus a Deo, in quo dejicies adversarios populi mei>（『マカバイ記 二』、15－16）と記された巻紙をもっていた。その右手には別の預言者が立ち、「獣の中で最強の獅子はいかなる攻撃も恐れない」<Leo fortissimus bestiarum ad nullius pavebit occursum>」(『箴言』30－30)と記された巻紙をもっていた。獅子の左側には、別の預言者が立ち、「獅子の仕事においても同様になされる」<Similis factus est leoni operibus suis>と記された巻紙をもっていた。さらにその他に別の預言者たちがそれぞれ手に巻紙をもって立っていた。

⑥　別の舞台が、公の邸宅近くの両替通り(la rue des changes)におかれ、預言者ヨシュアが、「このように主（神）は汝のすべての敵になす」<Sic faciet Dominus cunctis hostibus vestris> と記された巻紙をもって立っていた。さらに舞台におかれた別の巻紙には「私の祝福されたる主は私の手を戦いへと導く」<Benedictus Dominus meus docet manus meas ad pr(o)elium>と記されていた。

⑦　公の邸宅近くにおかれた最後の舞台。手に笏をもつソロモン王が騎士たちに囲まれて玉座にすわっている。その隣に侍女たちに囲まれたシェバの女王がおり、「汝を汝の祖国（イスラエル）の王位（冠）に就けることを望ま

れた汝の神、主は称えられますように」<Benedictus sit Deus tuus tui compsarvisti et posuit te super thronum patris tui Reg.>（『列王記』10－9）と書かれた巻紙をもっていた。

2　入市式後のシャルル：1 月 24 日―2 月 19 日

上述のように行われたディジョンへの入市式の翌日、シャルルは、朝 9 時にサン・ベニーニュ教会でのミサに出席した。その後、ディジョンの市長とエシュヴァン（messieurs les mayeur et eschevins）によりシャルルに対して銀製の二つの壺（les deux grans potz d'argent）が贈呈され、都市ディジョンが彼の訪問に対して対価を支払うことが宣言された。その翌日、シャルルは、官房長ギョーム・ユゴネや、マレシャル（maréchal）のアントワーヌ・ド・リュクサンブールらを伴い、再びサン・ベニーニュ教会を訪れている。その後、公の邸宅の広間（Salle des Gardes）で宴会が開かれ、シャルルは公領の貴族たちの挨拶(hommage)を受けた。さらに、邸宅の別の間に聖職者、貴族、市長、エシュヴァンらが集められ、官房長ユゴネが彼らにスピーチ（un grand discours）を行った後、シャルル自身が、ディジョンの諸身分の代表たちに対して、慎重かつ雄弁に「ブルゴーニュ王国」（の復興）について語ったという。それは、シャルルが前年の 9 月にトリアーでのフリードリヒ 3 世との会談において、フランス（王）が長い間横領してきた「王国」としてその回復を志向したものの、実現しえなかった問題であった[18]。

かかる入市式の後、2 週間を経た 2 月 8 日から 11 日にかけて、7 年前にブルッヘで没した父フィリップの遺体をブルッヘからシャンモール（Champmol）のシャルトゥルーズ修道院へ移送する儀式が行われ、シャルル自身もシャンモールへ赴いた。父親のシャンモールへの埋葬の儀式を含め、彼のディジョン滞在は、ほぼ一か月にわたった。そして、2 月 19 日に彼はディジョンを出発してブルゴーニュ伯領（comté de Bourgogne）の領有宣言のためにドル（Dôle）へと赴いている。以後、1477 年にナンシーで戦死するまで、彼はもはやディジョンに戻ることはなかったのである[19]。

---

[18] Quarré, op.cit., p.334. : R.Vaughan, *op.cit.*, pp.131-155.
[19] Quarré, op.cit., p 340：E.Tabri,*op.cit.*, pp.124-125.

3　解釈

それでは、以上のようなディジョン入市式において設定された活人画の舞台で示されたメッセージは、ブルゴーニュ公領におけるシャルルの入市式の中でどのような意味をもつものであったか。表１は、ブルゴーニュ公としてシャルルが行った公領の都市への入市式の一覧である。

表１　シャルル・ル・テメレールの都市入市式（1467-77）

	年代	日付	都市	活人画ステージ	十字軍モチーフ
1	1467	6月28日	Gent		
2	1467	7月3日	Mechelen	7	
3	1467	7月12日	Leuven		
4	1467	7月14日	Bruxelles		
5	1467	9月5日	Antwerpen		
6	1467	3月27日	Mons	8	*
7	1468	4月1日	Soignies		
8	1468	4月4日	Maubeuge & Quesnoy		
9	1468	4月5日	Valenciennes		
10	1468	4月7日	Lille	23	
11	1468	4月9日	Brugge		
12	1468	4月21日	Damme & Sluis	3	
13	1468	4月22日	Middelburg		
14	1468	4月25日	Zierikzee & Goes		
15	1468	7月19日	Den Hague		
16	1468	7月22日	Leiden		
17	1468	7月23日	Haarlem & Amsterdam		
18	1468	7月27日	Delft		
19	1469	3月16日	Arras	11	*
20	1469	4月22日	Saint-Omer	6	
21	1470	6月26日	Ostend		
22	1471	6月17日	Abbeville		
23	1472	5月15日	Douai	10	
24	1474	1月23日	Dijon	7	*

出展：J.D.Hurlbut [2013]

表２　シャルル・ル・テメレールの都市入市式における活人画の表象

年代	都市	聖書の人物	古代（神話）の人物	騎士的人物	アレゴリー
1468	Mons	ジュディス、聖ヴァンサン、聖ヴォードゥルー	バッカス、ヴィーナス		高貴と7つの美徳
1468	Lille		パリス		
1469	Arras	ゲトロ、聖ジョルジュ、ジェイル ロボアン、アブメレック	マンリウス・トルクァトゥス、スキピオ トロヤ人ブルートゥス ヴェルギリウス	アラゴン王 アーサー王	正義
1472	Douai	ダヴィデ、ヨシュア、マカベのユダ	ヘクトル、アレクサンダー、カエサル	カール大帝、アーサー王 ゴドフロワ・ド・ブイヨン	
1474	Dijon	イエス、ギデオン、エレミア、ヨシュア、ソロモン王、シェバの女王			分別 正義

出典：E.Lecuppre-Desjardin [2004] ; H.Chabeuf [1902]

ブルゴーニュ公となる前のシャロレ伯の時代（1461 年 10 月 6 日）に、シャルルは一度ディジョンに入城しているが、ブルゴーニュ公としての入市式は、1474 年が最初で最後であった[20]。ブルゴーニュ公としてのシャルルは、1467 年のヘントへの入市式をはじめとして公領内の都市へ 24 回（28 都市）入城しているが、その入市式の時期は大きく二つに分けられる。第一の時期は、1467 年のヘントへの入市式から 1468 年の前半までである。最初に行われた 1467 年 6 月のヘント入市式については、別稿で論じたが、シャルルの都市への入城がヘントの守護聖人（Sint Lieven）の祝祭日と重なる日が選ばれたため、ヘントのギルドの反発と抵抗を招いたのであった[21]。以後、彼は、1468 年の半ばまでに 24 回の入市式を主にフランドル伯領とブラバント公領の都市において行っている。この時期は、シャルルにとって、集権政策にとって障害となっていたフランドルの有力都市（ヘント、ブルッヘ）を中心とする抵抗勢力との拮抗関係にあり、とりわけリエージュ司教領のディナンとリエージュに対しては、都市破壊の罰を与えることによってブルゴーニュ公による都市支配の実効性を明示した時期であったと考えられる[22]。続く 1468 年の後半から 1472 年までの 3 年半は、フランス王ルイ 11 世との対抗関係の中で、シャルルがブルゴーニュ公領を最大の領域に拡大していった時期である。この時期に彼は、北部ネーデルラント（ホラント、ゼーラント）の主要都市(デン・ハーグ、レイデン、ハールレム、アムステルダム、デルフトなど)への入市式を行うとともに、フランス語圏フランドル地域の掌握のためにアラスをはじめとする主要なアルトワ 4 都市（アラス、サン・トメール、アヴヴィル、ドゥエ）に入城し、盛大な歓迎を受けたのである[23]。そして、彼の生涯で最

---

[20] Hurlbut, *Ceremonial Entries*, p.328；Chabeuf, op.cit.p.157 .

[21] 河原温「15 世紀ヘントにおける都市・宮廷・儀礼―ブルゴーニュ公のヘント入市式を中心に―」高山博・池上俊一編『宮廷と広場』、刀水書房、2002 年、207－227 頁; Lecuppre-Dejardin, *op.cit*., pp.294-302.

[22] M・ボーネ「都市は滅びうる―ブルゴーニュ・ハプスブルク期（14－16 世紀）低地地方における都市破壊の政治的動機―」服部良久編『紛争の中のヨーロッパ中世』、京都大学学術出版会、2008 年、278－308 頁；青谷秀紀「癒しのポリティクス―中世後期ネーデルラント都市の聖年とブルゴーニュ君公―」『清泉女子大学紀要』第 59 号、2011 年、21－35 頁。

[23] E.Le Cuppre-Desjardin, *op.cit*., pp.145－146.

後を飾る盛大な入市式が、1474 年 1 月に南部ブルゴーニュ公領の中心都市ディジョンへの入城であった（**表 1** 参照）。

ディジョンへのシャルルの入市式においてまず注目されるのは、多くの点でこの入市式が 1384 年 4 月 26 日の初代ブルゴーニュ公フィリップ・ル・アルディ（豪胆公）によるブルッヘへの入市式に類似していたことである[24]。フィリップとシャルル両者は、いずれも都市(ブルッヘとディジョン)およびそれぞれの都市の主要な教会(シント・ドナースとサン・ベニーニュ）において特権と自由を保障する誓約を行っている。異なるのは、フィリップが公妃マルグリートと共に都市へ入城したのに対し、シャルルが公妃を伴わなかったこと、およびフィリップがブルッヘのシント・ドナース教会で金貨 28 枚と金の布を教会への贈り物として奉献したのに対し[25]、シャルルはサン・ベニーニュ教会へ何も贈呈しなかったことである。しかし、この相違は、E・タブリも指摘するように、「活人画」の舞台のページェントの内容を見るとき、シャルルの入市の典礼的意義を弱めるものではなかったと考えられる[26]。

活人画のページェントについてはどうであろうか。シャルルによる入市式の一覧からすると、入市式の際に「活人画」の舞台が設定された事例は 8 回あり、ディジョンもその一つに含まれる。「活人画」の舞台が 7 箇所というのは 1468 年のリールの 23、1469 年のアラスの 11、1472 年のドゥエの 10 箇所に比して少なかったと言えよう。また、フィリップ・ル・ボン時代の入市式

---

24 E.Tabri, op.cit., p.123.

25 フィリップ・ル・アルディがシント・ドナース教会でなした誓約の場面については、同教会の書記ペーテル・ヴァン・エイクによる記述がある: <Anno domini 1384,……dominus Philipus dux Burgondie et domina Margareta ducissa Burgondie et comitissa Flandrie intraverunt villam Brugensis……Et tunc dictus dominus dux processit ad altare et immolavit umum pannum aureum et xxviii peciis auri,……>(Bischoppelijk Archief te Brugge, A48, Acta Capituli, fol,111r.（J.M.Murray, The Liturgy of the Count's Advent in Bruges, from Galbert to Van Eyck, in:B.A. Hanawalt & K.L. Reyerson(eds.), *City and Spectacle in Medieval Europe*, Minneapolis, 1994, p.148 注２より引用)。

26 E.Tabri, *op.cit*.p. 123.君主の入市に際しての贈物の交換儀礼とその意義については、M.Damen, Princely entries and gift exchange in th Burgundian Low Countries : a crucial link in late medieval political culture, *Journal of Medieval History*, vol.33, pp.233-249 を参照。

においては主要なモチーフとなっていたものの、シャルル自身はそれほど熱意を持っていなかったと思われる対オスマン（トルコ）十字軍へのモチーフがモンス（1468 年）とアラス（1469 年）に続いてディジョンの舞台において再び提示されたことが注目される[27]。

他方、「活人画」の舞台における表象（表２参照）についてみると、ディジョン以前の入市式の事例でみられる古代（神話）や中世の騎士的人物が用いられず、もっぱら旧約聖書の人物に集約されていることが指摘できる。シャルルはまず、預言者たちにより「汝らの王」としてディジョンのすべての身分の者たちに喜びをもって迎えられ（①②③の舞台）、ギデオンのごとく戦士として（シャルルと都市の）敵と戦うことが期待される（④⑤⑥の舞台）。そして最後の舞台⑦において、ソロモン王とシェバの女王の前でシャルルは、イスラエルに代わる祖国（ブルゴーニュ公領）の「王位」を与えられるという流れになっている。

この点で注目されるのは④と⑦の舞台であろう。④の舞台では、旧約聖書の『士師記』にみえる古代イスラエルの戦士ギデオンが、シャルルを象徴する存在として登場する。ギデオンは、ギリシア神話の英雄イアソンと並んで先代のフィリップ・ル・ボンが 1430 年に創設した金羊毛騎士団の守護者とみなされていた[28]。両者がフィリップ・ル・ボンの時代からブルゴーニュ公の英雄モデルであったことから、息子のシャルルにおいてもそのモデルとしての重要性は継承されたと言えるだろう。十字軍のモチーフが再び提示される中で、ギリシャ神話の英雄（異教徒）であるイアソンではなく、古代イスラ

---

[27] シャルルと対オスマン十字軍の問題については、以下の文献を参照。R.J.Walsh, Charles the Bold and the crusade: politics and propaganda, *Journal of Medieval History*, vol.3, 1997, pp.53-86; J.Pavio, *Le duc de Bourgogne, la croisade et l'Orient (fin XIVe siècle-XVe siècle)*, Paris, 2003, pp.177-195.1471 年 2 月にはナポリ王フェルナンドから、また 1471 年 9 月には新教皇シクストゥス 4 世からシャルル宛にオスマン十字軍への参加を打診する書簡が送られている。Pavio, *ibid*., p.185 ; *ibid*., Pièces Justificative:nr.XVI (18 fevrier, 1471); nr.XVII (24 septembre, 1471).

[28] 今井澄子「ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンの「モデル」―≪ギデオンのタペストリー≫の政治的・宗教的機能―」『大阪大谷大学紀要』47 号、2013 年、13－17 頁。

エルの英雄であるギデオンが、シャルルに擬せられているのである。ギデオンは、「信仰によって・・・国々を征服し、正義を行い、・・・戦いの勇者となり、敵軍を配送させた者たち」の例として、新約聖書の『ヘブライ人への手紙』（第 11 章）にその名が挙げられており、また、「指導者としての統率力を備え、イスラエルを解放した」人物（『旧約聖書』「士師記」第 6 章）であった。ギデオンは、父フィリップ・ル・ボンにとってと同様、シャルルにとっての信仰心をもつモデル戦士としてディジョン市民に示されたのである[29]。

また、⑦の舞台においては、シャルルが旧約の王（ソロモン）になぞらえられており、戦士と預言者の組み合わせを通じてシャルルが、地上の「新たなエルサレム」としてのディジョンを所有するに至ったことを示している。E.タブリによれば、ディジョン入市式における「活人画」の舞台のシナリオを数か月前から準備したのは、都市ディジョンの指導層（市長、エシュヴァン）とともに、シャルルの官房長ギョーム・ユゴネであったとみられ、「活人画」の舞台における巻紙のテクストの草稿はユゴネによるものであった可能性が高い。⑦の舞台においては、ユゴネの主君であるシャルルが、今やブルゴーニュ「王国」の「王」< rex> として旧約の王たるソロモンに重ねあわされて表現されたと考えられる[30]。そこでは、ブルゴーニュ公と歴史（旧約聖書の世界）との連続性が暗示され、ヘブライの王と同様、シャルルは、「徳」と「正義」を備えた統治者としての正統性を体現した信仰心をもつ「王」として都市ディジョンに受け入れられることが意図されていたと言えるだろう[31]。

1473 年 12 月のティオンヴィルの勅令以降、シャルルは、フランス王国と

---

[29] 今井、前掲論文、19－20 頁ではアラスの入市式におけるギデオンとフィリップの一体化の表現が紹介されている。Cf.,J.C.Smith, Portable Propaganda: Tapestries as Princely Metaphors at the Courts of Philip the Good and Charles the Bold, *Art Jouranl*, vol.48, 1989, pp.126-127.

[30] Tabri, *op.cit*., pp.123-124. ユゴネをシャルルの宮廷における最も重要なイデオローグとみる見解については、W.Paravicini ＆A.Paravicini, L'arsenal intellectual d'un homme de pouvoir: les livres de Guillaume Hugonet, chancelier de Bourgogne, in: *Panser le pouvoir au Moyen Age. Études offerts à F.Autrand*, Paris, 2000, pp.261-325 を参照。

[31] Tabri, *op.cit.*, p.124; W.Brückle, Political Allegory at the Court of Charles the Bold: Pageantry, an Enigmatic Portrait, and the Limits of Interpretation, in: *Staging the Court of Burgundy,* pp.122-123,

神聖ローマ帝国の狭間において、ブルゴーニュ（ブルグンド）ないし「ローマ」の「王」としての正統性のメッセージを対外的に発していた[32]。シャルルの 1474 年 1 月のディジョン入市式は、そのメッセージを現実の政治プロセスと不可分の儀礼として南部ブルゴーニュ公領の人々に視覚的に提示するものであったと考えられるのである。

おわりに

シャルル・ル・テメレールによる 1474 年ディジョン入市式は、彼の生誕の地であり、歴代ブルゴーニュ公の霊廟の所在地としてブルゴーニュ公家の神聖な場であった都市（ディジョン）を正式に所有することで、シャルルのブルゴーニュ公としての権威と偉大さを表現する儀礼となった。シャルルは、ディジョン入市式を通じて、彼の君主権力に内在する聖性を実現することができたのである[33]。その 3 年後の 1477 年 1 月、ナンシーにおけるシャルルの戦死によって、「ブルゴーニュ（ブルグンド）王国」はその実現半ばで潰えたが、シャルルにとって、ディジョン入市式は、彼の生涯における最後のそして最大のパブリック・セレモニーたり得たと言えるだろう。

＊本稿は、平成 25 年度科学研究費基盤研究（A）「制度と政治社会の相互関係から見たヨーロッパ中世の発展と変容」（研究代表者：渡辺節夫）に基づく分担研究の成果の一部である。

---

[32] シャルルの「王」としての正統性のイデオロギーの主張は、官房長ユゴネをはじめとする彼の宮廷の廷臣たちの言説に示されていたと言える。この点については、河原温「シャルル・ル・テメレールと 15 世紀後半ブルゴーニュ宮廷の政治文化―宮廷イデオロギーの形成をめぐって」『人文学報』（首都大学東京）475 号、2013 年 1－14 頁において論じている。Cf. W.Paravicini, Pax et Justitia. Charles le Téméraire ou la théologie politique par l'image, in: *Bulletin de la Société nationale des antiquaries de France*, 1995, pp.333－337.

[33] Tabri, *op.cit.,* p.126.